

誰にでもできる月一回の修行・毎月1日午前9時からおよそ1時間・心をととのえる「月初めの寺修行」、どなたでもお参りください
1月は午後2時からとなります



県津市に「シャトー・パ
 ム・ドール」を構え、開業25
 周年を迎えた。今回は主に坂
 井氏を中心として写真左「致
 知」608号から一部ですが
 抜粋紹介します。人間学談義
 をご参考に。
 ■また「生きるために牛や
 豚や鶏の命を奪っていいの？」
 と題し、中川 裕・千葉大学
 名誉教授が語る。

族の食事をつくっていました。
おふくろがいつも言っていたのは「**食乏は食乏でも、心まで食乏になる必要はないよ**」と、「**必ず腕に職を持て。そうすればどんな世界に行っても生きていける**」という言葉だったんです。
おふくろのこの言葉に加えて、

ある時、近所の港で旅客船のコックさんを見て、長いコック帽と白いコックコート姿に惚れ込んでしまった。これが料理人を目指すようになったきつかけです。

一度は高校に進学するも一年で中退し、故郷の鹿児島を離れてまず大阪の仕出し弁当屋さんに住み込みで働きました。毎朝3時に起床し、お米を研いだり釜に火を灯したり自転車で配達したり。次第にこんな生活を続けていて料理人になれるのかと疑問が湧いてきましてね。

そんな矢先に、深水さんという先輩が「おまえ、こんなところにも一流の料理人には絶対なれないよ。フランス料理のシェフを知っているから紹介してやる」と言われ、ホテル新大阪のレストランに勤めることができたんです。ここから僕の料

理人人生が始まりました。

■後藤 よき先輩とのご縁に恵まれましたね。

■坂井 いい先輩はフライパンや鍋に残っているソースで「味を見とけ」と言ってくれるんですけど、意地悪な先輩はすぐに水につけちゃう。親方や先輩に可愛がられないと、仕事を与えてもらえない。

だから僕は「絶対に敵をつくらない」「要領よく立ち回る」「先延ばしにしない」という3つのことを心掛けていました。絶対に敵をつくらないというのは、親方や先輩が快適に仕事ができるように準備を整えておくことです。例えば、冬場は親方や先輩が起きてくる前に調理場を暖めておかないといけない。当時は石炭ストーブですから、時間がかかるんです。だから、

前日の夜に釜の灰を掻き出し、翌日使用する石炭を入れておく。そうやって少しでも早く暖まるようにしていました。

要領よく立ち回るには、調理場で自分に与えられた仕事に集中しつつも、常に先輩の動きを見て、先読みして行動することが必要です。お皿を欲しそうにしているなど思ったら、言われる前にサツと用意しておく。

■写真⑤は日本の通勤風景。写真⑥は日本のスーパー駐車場。アメリカの駐車場では車を前から駐車がすることが当たり前で、写真のようにバックから駐車をすることは日本だけです。写真⑦は台並業施設に設置されていた「どこの国から来ましたか？」ケートボードです（上段右から韓国・日本・アメリカ）。これらを見ると日本人が如何にルールを順守する国民かが分かります。クロード・レヴィ・ストロースの次の声が聞こえます。「ごめんなさい」。

「ありがとう」。「お先にどうぞ」。「お陰さまで」。

こうした言葉が無意識に口からこぼれる日本社会。これはまさに「文明の極致きょくし」である。

みんなお客さんが一番大事だと思っているけど、そうじゃない

30万円のスーツ

■後藤 準備不足で「なんであれがないんだ」と言われているうちは話にならない。料理は段取り力ですべて決まります。

■坂井……もう一人の師は、金谷鮮治さん。料理人である前にまず一人の人間としてどうあるべきかを教えてくださった人。生の師であり、原点の人です。

★金谷鮮治（かなや・せんじ）
鬼怒川温泉ホテル代表取締役社長。日本旅行協定旅館連盟会長。日本ホテル協会理事長などを歴任。昭和52年67歳没。

い。まずスタッフ、その次はスタッフの家族、3番目がお客さんだよ。スタッフが楽しく仕事をできたければ、お客さんにおいしい料理を

「屈けることはできない」とも教えてくれました。これはいま僕の実感でもあります。

■坂井 僕はこれまで独立し

した時に、その自分の姿に惚れないと絶対にダメです。

■後藤 本当にその通りですね。
(「致知」608号から一部紹介)

生きるために牛や豚や鶏の命を奪っていいの？

■なぜ、人間は牛や豚や鶏を食べて良いのか。それらの動物の命を奪っても良いのか。

殺してはいけない」のだと。
 ■ 大方の日本人には、そうした明快な答えがない。そもそも明治時代まで、四足動物は食べてはいけないかったのだ。それが文明開化とともに、おもにキリスト教圏から肉食の習慣が入ってきたわけだが、その背景となるキリスト教は広まらなかった。

は感謝すべきである。しかし、「と畜場」で働く人たちの生活をテレビで見ることとはなく、「と畜場」が舞台のドラマを見ることもない。その存在を無視していることすら、意識しない。

■生き物を食べること自体は罪ではない。人間は他の生物から命を奪わずに生きることでは

そつという問いかけを、授業でよく行う。もちろん、答えられる学生などほとんどいないのは承知の上である。たまたま、欧州などキリスト教文化の中で育つた学生がいると、明快な答えが返ってくる。「牛や豚や鶏は、**神様が人間の食べ物として造ってくれたものだから、食べて良い。**犬や猫は、神様が食べ物として造ったものではないので、

だから私たちは、なぜ、そうして良いのかも分からずに、牛や豚を殺し続けているのである。

■あらためて問おう。なぜ私たちは牛や豚や鶏を殺して良いのか。私は牛も豚も殺したことなどない、と答える人もいるだろう。だがそれは、お金を払って他人に殺してもらっているからだ。自分の代わりにその仕事をしてくれる人たちに、私たち

きないからだ。ただ、私たちは今一度、食べているもの、着ているものが、どうやってそこにあるのかを考える必要があるのではなからうか。

■日本人は命を「いただきます!」との挨拶のもと食事をしたくのだが、アメリカ人は「無言」で食べるという。言っても「レッツ イート・さあ食べよう」

「この宇宙は単なる物質の機械仕掛けではなく、一つの意志によって貫かれている」ノーベル物理学賞受賞・物理学者であり仏教礼賛の
 アインシュタイン。仏教での「一つの意志」とは法華經で説くところの「久遠のご本仏・寿量ご本仏」の「意志」であり「妙法蓮華經」の「意志」である。